

平成23年4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

明治43年の青梅の馬方・運送業

—西国三十三所観世音菩薩霊場写し碑 第二十九番 丹後国松尾寺写しの石碑より—

青梅市仲町の梅岩寺境内から裏山の秋葉山にかけて、西国三十三所観世音菩薩霊場写し碑が建てられています。第二十九番碑はそのうちのひとつで、青梅駅北側の永山ハイキングコース上、第二休憩所登り口手前にあります。西国三十三所観音霊場は関西圏の広域に在るため、誰もが簡単にお参り出来るものではありません。そこで各霊場ゆかりの石塔を建て、ここを巡ることで現地を巡拝するのと同じ功德を得ようと思いました。加えて、梅岩寺境内の山門西側に立つ第一番碑に、「・・・日清日露両役戦病死者並に斃死牛馬諸霊菩提の資糧に充つ・・・明治41年12月21日」とあるように慰霊も目的としました。第二十九番碑は、この趣旨に賛同した馬方・馬持中により、明治27～28（1894～1895）年の日清戦争・明治37～38（1904～1905）年の日露戦争後の明治43（1910）年に建てられました。三十三観音中、本尊が馬頭観世音菩薩であるのは唯一、第二十九番・京都府舞鶴市にある松尾寺ですので、馬方・馬持中の建碑は第二十九番になりました。

碑は、幅106cm奥行き45cm高さ37cmの台座上に立つ、最大幅90cm・平均の厚さ15cm・高さ180cmの大きさの自然石です。道路側は裏面で、正面は南側を向いています。台座正面に「馬持中」、碑の正面に「三面六臂(手)の馬頭観音像(図) 西国第二十九番 丹後国松尾寺写 馬頭観世音菩薩 そのかみは いく世経ぬらん 便りおば 千歳もこゝに まつのをのてら」と陰刻されています。碑の裏面には、「明治四十三年三月建之」とあり、寄付金額と所・名前が4段に、びっしりと陰刻されています。ほとんどは個人による寄付ですが、「馬持中」・「運送店」と刻まれた団体名もあります。なお、すべての刻字が完成した後に、3名分が明らかに追加されたと分かる状態で、余白部分に刻字されています。漏れがあったのか、後からのたつての希望だったのか、珍しい例です。以下、碑の刻字をまとめてみました。

[運送店] 青梅町(2件)・日向和田(2件) <計4件>

[個人名] 青梅町・裏枳町☆(10人)森下(4人)大柳☆(4人)勝沼(2人)
 上町(1人)田向(1人)西分(1人)調布村・千ヶ瀬(8人)
 上長淵(3人)霞村・師岡(3人)吹上(1人)大門(1人)塩船(1人)
 根ヶ布(1人)三田村・二俣尾(1人)小曾木村・黒沢(4人)
 西多摩村☆(1人) <計47人>

[世話人] 青梅町・大柳(1人)天ヶ瀬(1人)森下(1人)裏枳(1人)上町(1人) <計5人>

[寄付金] 金5円(2村の馬持中で1件。個人3人。)
 金3円(馬持中1件。個人6人。)
 金2円(運送店3件。個人14人。)
 金1円50銭(運送店1件。個人24人。) <合計112円50銭>

☆ 青梅町大極あるいは青極町と刻されているものは大柳としました。裏枳町は一時期のみの呼称で、裏宿のことです。西多摩村は現在の羽村市です。

この碑から、明治43年(1910)当時の馬方・馬持中の青梅でのおおよその分布状況と、「運送店」がすでにあったことが分かります。「運送店」については、『青梅市史下巻』によると、「明治27年青梅鉄道が開通したころは荷馬車が全盛で、各駅にそれぞれ個人が特約関係を結んで運送業を営み、運輸組合を組織していた。」とあります。また「西多摩地区で貨物自動車による物資の輸送をはじめたのは、おそらく大正11年4月に発足した福生の交運社であろう。」としています。このことから、青梅町2件・日向和田2件の「運送店」は、青梅鉄道の開業駅である青梅・日向和田地区にあり、先進的な営業形態であったことが分かります。しかし、まだ自動車ではなく、馬力による荷馬車であったため、馬方・馬持中同様、馬への愛着は強く、建碑に寄附を寄せたと考えられます。

馬方・馬持中・荷馬車による運送店従事者は、馬への深い愛情を持っていました。戦時に徴発され斃死した馬への気持ちはいかほどであったか、第二十九番碑へ寄附を寄せた当時の馬方の気持ちは、伝わってきます。

西国三十三所観世音菩薩霊場写し碑が建てられてから年月が過ぎ、建碑の目的は忘れ去られ、行方不明になったり割れたりしている碑もあります。第二十九番碑も、台座との接合部がやや傾いています。建碑した人々の心情を^{おもんばか}慮り、大切に保存していきたいものです。(文責 三好 ゆき江)



西国三十三所観世音菩薩
 霊場写し碑 第二十九番